

〈翻訳と訳者解説〉

誰が出場し、誰が除外されるのか？

——パラリンピック競技大会における適格な身体とは——

著者：デイヴィッド E. J. パーデュ & P. デイヴィッド ハウ

訳者：樫田美雄* 神戸市看護大学 ・ 平澤彩乃 神戸市外国語大学

*E-mail : kashida.yoshio@nifty.ne.jp

Who's In and Who Is Out?

: Legitimate Bodies Within The Paralympic Games

Author: David E. J. Purdue and P. David Howe

Translator: KASHIDA Yoshio (Kobe City College of Nursing) &
HIRASAWA Ayano (Kobe City University of Foreign Studies)

要旨

本論文は、パラリンピック競技大会における身体障害のインクルージョン（包含性）を取り巻く諸問題について取り扱う。この目的を果たすために、パラリンピック関係者に実施した、一連の半構造化インタビューから集められた経験的データを利用する。本データが分析される背景には、国際パラリンピック委員会（以下IPC）の近年のビジョンおよびミッションに関する重要な分析がある。分析を実現するにあたり、ピエール・ブルデューの「ハビトゥスと資本」（Bourdieu, 1997, 1984）の概念が理論基盤となっている。脳性麻痺（原注 1）や、あるいは重度の身体障害を抱える個人らを取り巻く諸問題に関する、パラリンピック関係者（ステークホルダー）の意見に議論の焦点を当てる。その諸問題とは、ある程度、“審美的に好ましいスポーツパフォーマンス”を望んでいることに起因している。本論文は、IPC および幅広いスポーツコミュニティにとって選択肢になるかもしれない意見を、パラリンピック関係者に表明するものである。

[本文]

※ 訳文中の【 】中の文字列は、訳者によって補足されたものである。

近年のパラリンピック競技大会では陸上競技場、サイクルレース場、水泳プールなどのスポーツ競技施設で躍動する筋肉質の身体の画像に、我々の関心は、集まっている。関心がこのようにパラリンピアン達の身体の上に集まることは喜んでよいことかも知れないが、その一方で、パラリンピック競技大会の社会文化的文脈の観点から見ると「何故人々の目から次第次第にある種の身体障害が隠されていくのか」について、より詳細に検証を行うための批判的なスポーツ社会学が必要でもあろう。

本論文では、20人のパラリンピック関係者に実施した半構造化インタビューから集められた経験的データを利用し、パラリンピック競技大会における身体障害のインクルージョン<包含性>を取り巻く諸問題について取り扱う。選ばれた選手によるスポーツパフォーマンスが審美的に価値があるということの重要性に鑑み、ブルデューのハビトゥスと資本にかかわる社会学的概念を基にして、脳性麻痺や、あるいは重度の身体障害を抱える個人らがどのように知覚され、そして、彼らが、どのように扱われるようになるか議論する。

中立的で均質化された生物医学的メカニズムとしての身体ではなく、社会的な存在物としての身体が持つ重要性は、ある程度、スポーツ社会学において論じられてきた(Shilling, 2003)。その一方で障害を抱える人々の身体は、障害学の分野において学者の注目を集めてきた(Cregan 2006; Hughes & Paterson, 1997; Paterson & Hughes, 1999)。しかしながら今までのところ、当該身体にまつわる社会的な認知の影響に関して、障害者のスポーツをするアイデンティティについては限定的な調査しか行われていない(DePauw, 1997)。本論文は、パラリンピック競技大会を例にとり、「障害のある人々」および「障害のあるスポーツを行う人々」に関する社会学者間の研究を鼓舞しようとするものである。本論文における「障害のある人々」とは、個人のアイデンティティを強く支配するものとしての障害を持つ人々を指す。「障害のあるスポーツを行う人々」とは、障害を超えて、多かれ少なかれ一人のスポーツマン/スポーツウーマンとしてのアイデンティティを持つことが判断および認識される人々のことを指す。

国際パラリンピック委員会(IPC)が統率する夏季パラリンピック競技大会は、知覚的、身体的、知的障害を抱える人々のための、4年に一度開催される国際的なマルチスポーツ競技会である。これはもともとは、国際ストック・マンデビル競技会という、ルートヴィヒ・グットマン医師(のちに sir の称号を得る)がイギリスのアリスバリーにあるストック・マンデビル病院において、脊髄損傷を抱える患者たちのリハビリテーションとしてスポーツを利用したことから発展した協議会である(Brittain, 2008; Guttmann, 1976)。近年、パラリンピックに関する重要な社会学的研究が多くみられるようになった(Purdue & Howe, 2012a; Brittain, 2010; DePauw & Gavron, 2005; Gilbert & Schantz, 2008; Thomas & Smith, 2009)が、これらの研究の多くについてより詳細な検証を行うと、十分でないことが判明する。

我々の望みは、肉体としての身体の重要性に気付き、認識することである。その重要性というものは、社会的構成の理解のなかに存在するものであるが、それによって社会がいかにかに「身体に書き込まれているか」(Bourdieu, 1990:63)ということへの理解が促進される。

本論文の理論基盤を築くために、スポーツ社会学にとってのブルデュー的分析が持つ価値を手短に概観する。その後、IPC のビジョンと IPC のミッションを簡潔に概観する。これら 3 つの要素は「パラリンピックがどのようなタイプの身体を称えるのか、あるいは称えるべきなのか」に関する現在の諸問題を評価するための便利なスタート地点である。資料は、後述の経験的データに基づくものである。パラリンピックのようなエリート的障害者スポーツ競技会において求められているパフォーマンスを披露することができないがゆえに、特定の「障害のある」身体がいかにかにして潜在的に排除されてきたのかを本論文では明らかにする。

ピエール・ブルデューとスポーツ社会学

ピエール・ブルデューは数十年にわたって、メディア(Bourdieu, 1998)や社会階級がスポーツに及ぼす影響(Bourdieu, 1978, 1984)を含む様々な文化的背景および諸問題について研究してきた。ブルデューが発展させた社会学的概念は、スポーツの社会科学的調査において他の学者たちにも用いられた(Clement 1995: Laberge & Sankoff 1988; Wacquant 1992)。その調査の中にはパラリンピック・スポーツも含まれる(Howe, 2008a)。その研究の中でもとりわけ、ブルデューによる「ハビトゥスと資本」の概念化は役に立つものであった。以下、ハビトゥス(Bourdieu, 1984)と資本(Bourdieu & Wacquant, 1992)について定義する。

ハビトゥスに関して、Bourdieu (1984)では以下の通り述べられている。

ハビトゥスとは、単に実践と実践の認知を組織化する構造を作り出す構造であるだけでなく、構造化された構造でもある。即ち、社会的世界に関する認知を組織化する論理的諸クラスの区分原則そのものが、社会階級の区分原則の内面化の産物なのである。(p.170)

ここでは、個人が規則と思考構造を獲得および具現化し、そうやって社会化していく、その過程を、分節化された形で述べている。それらの社会的図式は、行動に影響を及ぼすガイドとして機能する。非常にそうであるため、決心も行為もほとんど第2の天性として、身についたものになりうる。たとえ資本やジェンダー、あるいは障害のような外見上の身体的相違に基づいていたとしても、社会階級というものは、ハビトゥスという広範囲かつ非常に影響力のある構造の一部を、不可避的に成しているのである。

Bourdieu (1997)では、資本という用語が、相互関係や相互依存および、相互関係や相互依存における力の均衡が持つ意味を模索するため、帰属させるために用いられている。資本の様々な形の対立や流れは、ほぼ間違いなく、特定の社会関係によって容易にされたり妨げ

られる。Bourdieu (1997)によって分節化された資本の形のひとつは、「相互面識および相互認識という、ある程度は制度化された関係性という持続可能なネットワークを所有していることと関連する、現実的な、あるいは潜在的なリソースの集積物」(p.51)と考えられる、社会資本というものである。社会資本の享受に加えて、社会関係の創造と継続は、経済資本のコストを招く恐れがある。この経済的な支出は、資本の種類や量のさらなる蓄積を促進すれば、有益なものであると捉えられるだろう。

社会関係についてより深く理解するために、ブルデューは文化資本という概念も用いた。この用語は、嗜好や、特定の社会グループの一員であることに由来する消費パターンおよび振る舞いを意味する(Bourdieu, 1997)。プロスポーツにおいては、エリート選手のブローカー(周旋屋)が、代理人を経由して、雇用契約やスポンサー契約をすることが、しばしば見られるので、「時には、社会資本と文化資本は経済資本に転化しうる」と主張する者もいるかもしれない。しかしながら社会資本と文化資本はそれぞれ独立に、ブルデューが象徴資本と呼ぶものに変化するものである。Bourdieu and Wacquant (1992)は、象徴資本を「[経済資本、社会資本、文化資本の]これらのうちいずれかが、その特定の論理を認識する知覚のカテゴリーを通して把握されるときに取る形態である。あるいは、そう言いたければ、所有と蓄積の恣意性を誤認識するような知覚のカテゴリーを通して把握されるときに取る形態であるとも言い換えることができる」(p.119; 原文ではイタリック体表記【であるとパードューとハウが述べている】)と定義している。名声、地位、権威が象徴資本のタイプとして、そのアイデンティティを決定すると主張されてきた(Mahar, Harker & Wilkes, 1990)。

組み合わせて使用される場合、ブルデューのハビトゥスと資本の概念は、エリート的障害者スポーツに関する社会調査を実施するための便利な社会学的ツールとして機能するであろう。ハビトゥスは、個人と社会の間関係性を、誤った二分法を引き起こすことなく概念化する。多くの資本は洗練されたレンズを提供する。そのレンズを通して、異なった観点から社会関係の意味を見出し、それによって個人が存在する社会を解明するのである。ブルデュー的な分析の中心的概念を定義し終えたため、次はIPCのポリシーの概要に着目することにしよう。このことによって、本研究の中心にある経験的データを分析するための背景を入手できよう。

国際パラリンピック委員会—ビジョンとミッション

1989年に結成された国際パラリンピック委員会は、夏季と冬季の2つのパラリンピック競技大会の開催を担う国際的な統率団体であり、9つのパラリンピックスポーツ競技の国際連盟としても機能している(IPC, 2011a, 2011b)。世界中の様々な障害者スポーツ機関(IOSDs)を一つの傘下にまとめることを目的に、1982年に設立された、障害者スポーツのための国際調整委員会(ICC)から生まれた(Bailey, 2008)。国際脳性麻痺者スポーツ・レクリエーション協会(CP-ISRA)や国際視覚障害者スポーツ連盟(IBSA)などの、IPCを設立した多くの障害者スポーツ団体は、今日まで機能し続けている。また、他の障害者スポーツ機関

と合併することで組織の存続を維持するものもある。例えば、2004年に国際ストーク・マンデビル車いす競技連盟(ISMWSF)と国際障害者スポーツ機関(ISOD)が合併し、国際車いす・切断者競技連盟を結成した(IWAS)。今日では、これらの組織が持つ議決権は弱まり、主に未来のパラリンピック選手の養成を担っている。IPC 発足以前と比較すると、パラリンピックスポーツの未来の方針決定における、これらの諸障害者スポーツ機関が持つ影響力は相当弱い。柔道の IBSA やボッチャの CPISRA、車いすフェンシングの IWAS(IPC 2012を参照)のように、パラリンピック競技大会においていくつかのスポーツは未だに特定の障害者スポーツ機関によって統率されている。それにもかかわらず、IPC は支配力を保ち続けているのである。

近年、IPC はあらかじめ決められたビジョンのもとで機能しており、そのビジョンはいくつかのミッション的目的を含んでいる。そのビジョンとミッションを利用しながら IPC はある特徴的な文化的イデオロギーを作り出した。それはエリートの障害者スポーツという、特定の政策を促進し、形成する。IPC のビジョンとミッションの政策の側面を略述することにより、「障害のある」身体と「障害のあるスポーツを行う」身体に関する社会的認知がパラリンピック競技大会で表明されている文化的背景について、より詳細な検討をしていきたい。

[ビジョン]

IPC のビジョンは「パラリンピック選手たちがスポーツに秀で、世界を鼓舞・刺激することを可能にする」(IPC, 2011c)ことである。これは、IPC のウェブサイト(IPC, 2011c)から引用したものであるが、ひとつひとつの言葉が明白な故意的意味を持っている。それぞれを以下に羅列する。

- To enable (可能にすること): これが IPC の組織としての主な役割である。選手が自己決定権を通して力をつけるために、環境を整えることである。
- Paralympic athletes (パラリンピック選手): パラリンピック選手という観点から、IPC の活動の中でも主な焦点となるものは、その始まりからエリート・レベルに到達するまで全ての選手たちを養成することである。
- To achieve sporting excellence (スポーツに秀でること): スポーツを中心に据えた組織としての目標である。
- To inspire and excite the world (世界を鼓舞・刺激すること): 外部へ向けた成果は、障害を抱える全ての人々にとっての、より良い世界へ貢献することである。これを達成するためには、外部組織との関係や、全体としてのパラリンピック活動のプロモーションを行うことが最重要である(IPC, 2011c; 強調部分はイタリックで表記【原文の強調部分は本翻訳でも斜体にしたうえで、下線が引かれている】)。

上述のように、IPCの活動における主な焦点は、エリート・レベルまで全ての選手を育成することである。のちの経験的データを考慮すると、我々はこのビジョンに留意し続けなければならない。またビジョンで述べられているが(IPC, 2011c)、同様に、パラリンピック競技に参加することを許可されなかった障害を抱える様々な人々を考慮すると、障害を持つすべての人々にとってのより良い世界への貢献において、IPCが果たしてどれほど効力を持っていたのか、考えることが重要である。そして、IPCが最重要視している声明にある「全体としてのパラリンピック活動のプロモーション」(IPC, 2011c)はポジティブで包括的な巧言だが、商業化のプレッシャーという観点から見ると、実は叶えることが困難であるかもしれない(Howe, 2008a)。究極的には、IPCのビジョンの達成は、IPCが自身のミッションを遂行することにかかっているのである。

[ミッション]

ミッションには、IPCの長期戦略的な幅広い目標が表れている(IPC, 2011c)。IPCのミッションのうち、本論文で挙げられている諸問題と最も関係のあるものを幾つか以下に記す。

- 全ての水準・体制において、女性や高度な支援が必要な選手のための機会を増やすこと。
- パラリンピック活動内で行われるスポーツにおいて、フェア・プレイの精神を必ず流布するために、暴力を禁じ、選手の健康リスクを管理し、基本的な倫理原則を支持することを確保すること。
- 政治、宗教、経済、障害、性別、性的指向、そして人種における差別なしに、パラリンピックスポーツを発展させること
- 継続的な世界規模でのプロモーションを行い、パラリンピック活動、スポーツを通じた鼓舞・刺激のビジョン、そして目標と活動をメディアに報道させること、を追求すること(IPC, 2011c; 強調部分はイタリックで表記【原文の強調部分は本翻訳でも斜体にしたうえで、下線が引かれている】)。

高度な支援を必要とする選手として認定される重度の身体障害者の包含<インクルージョン>を守る明白なセーフガードこそが、IPCのミッションに深く根付いている(IPC, 2011c)。さらに、漠然としているものの、基本的な倫理原則の支持を保証することは「パラリンピックスポーツを障害に基づく差別なしに発展させる」(IPC, 2011c)という声明と組み合わせると、パラリンピック競技大会というエリート的スポーツの場において、重度の身体障害を抱える人々が自分自身を表現し、スポーツの優れた能力を発揮することができるようになることを示す明るい兆候になる。

しかしながらこれらの理想は「継続的な世界規模でのプロモーションを行い、パラリンピック活動をメディアに報道させること」(IPC, 2011)というIPCのミッションにおいて試練となる。IPCが試みようとしているメディアとスポーツ間の生産複合体(Maguire, 1999)

は、資本とスポーツ愛好家を含む消費者を獲得するための熾烈な競争を通して生み出される。この点に関して Crawford(2004)は「現代のスポーツは、ますます過密になっていくエンターテインメント市場における消費者を奪い合っていることに気付いている。その市場では、消費者がより一層幅広い選択肢を握っているのである」(p.82)と述べている。そうだとすれば、IPCからお墨付きを得ることができる「障害のあるスポーツを行う」人としてのアイデンティティ付けを阻害するような、比較的重い障害を抱える「障害のある」人を犠牲にして、IPCはエンターテインメント的なショーを追求しようとしているのではないだろうか。主張を明白にするために、本論文で使用する「重度の身体障害」という用語について要約する。

パラリンピックスポーツにおける“重度の”身体障害

“重度の”障害という用語は、感覚障害や知的障害を持つ人には適用されず、排他的に身体的障害を持つ人々にのみ適用される。彼らはパラリンピックスポーツのクラス分けのうち、下位の区分内で競争する。パラリンピック水泳における重度障害が相当するクラス分け区分【classifications】(しばしば“クラス”と呼ばれる)は1から5である。パラリンピック水泳は合計で14の機能的クラス分け区分からなっている。身体障害を抱える選手は1から10のクラスの中で競い、1は最も重度の障害を抱える選手が、10は最も軽い障害を抱える選手がそれぞれ割り振られる(IPC Swimming, 2011)。

他の種目では、重度の障害を抱える選手が競う区分について、異なる基準を採用している。ボッチャでは、重度の脳性麻痺を抱える選手はBC1から3のクラスで競技を行う(CP-ISRA, 2011)。陸上競技に関しては、重度の脳性麻痺を抱え車いすで競技に参加する選手はF32から33に所属する(IPC Athletics, 2010: 17-18)。そして、歩行は可能だが重度の障害を持つ選手は、T/F35から36のクラスで競う(IPC Athletics, 2010: 24-5)。一方でパラサイクルでは、重度の脳性麻痺を抱える選手はT1あるいはT2三輪クラスで競技を行う(CPISRA, 2011; UCI, 2011: 12-13)。

上で述べたクラス分け区分のリストは完璧なものではなく、本論文で言及しているスポーツとその障害クラス分け区分のみをカバーするだけである。本論文で使用する“重度の”という用語の意味を明白にさせ、簡潔なものにするために挙げた次第である。この時点では「パラリンピック競技大会におけるスポーツイベントでは比較的軽い障害のみが包括される」という点を繰り返し強調する必要がある、またそうすることが妥当である。つまり、パラリンピックスポーツの観点から「重度(の障害)」と呼ばれているであろうものは、下位の区分に分類されてはいるものの、障害の範囲が広く生物医学的状况と関連しているため、より一般的には社会において「重度(の障害)」であるとは見做されないものかもしれない。パラリンピック選手たちの経験について考える際には、より重度の障害を抱える多くの人々はこのパラリンピック競技大会についての議論に含まれていないということを思い出す必要がある。彼らが含まれていないことに気づき、パラリンピック競技大会における「障害の

ある」人々の包括あるいは排除について、さらなる問題を提起するべきである。

メソッド

20人のパラリンピック関係者に実施した半構造化インタビューから集められたデータを利用し、パラリンピック競技大会における「障害のある」人々および「障害のあるスポーツを行う」人々のインクルージョン<包含性>を取り巻く諸問題についてさらなる検証を重ねる。(インタビューを実施する相手である)必要な知識を備えた人物は「ある機関で特定の役割や責任を担うなどの特別な知識に基づいて選ばれる人」(Gratton and Jones, 2004: 104)を意味するキー・インフォーマントをもとにした「キー・インフォーマント・テクニック(重要情報提供者を用いるインタビュー技法)」を通して、インタビューに適していると判断された。したがって、パラリンピック活動に従事した者、従事し続ける者、あるいは従事した経験を持つ者が、インタビューの対象に選ばれた。中には現/元パラリンピック選手、現役あるいは引退した障害者スポーツの理事、障害学とスポーツの社会学者、そして障害者の権利を擁護する人々も含まれる。これらの範疇は完全に線引きされているものではなく、中には元パラリンピック選手であり現在は障害者スポーツの理事であるような人物も存在する。

サンプルの基準が定められた後、インタビューを依頼する人物のリストを作成し電子メールを通して彼らとコンタクトを取った。豊富で質の高いデータセットを作り上げるために、このリストは適切な雪だるま式標本法で補われた。インタビューを受ける人物は全員、短い議題リストを与えられた後にインタビューを受けた。これらの議題は、インタビューの基礎をなすものである。質問は、3つのアプリオリなテーマ(以下を参照)と、障害と(あるいは)スポーツにおいて彼らが担った特別な役割に関するものであった。インタビューは録音し、一語一句を文字に起こした。そして匿名性を守るために、インタビューを受ける人物には仮名が割り振られた。グランデット・セオリー・アプローチ(Morse & Richards, 2002)に従って、インタビューの記録をコード化した。

実施した20のインタビューの21時間以上にわたる回答を集計し、いくつかのテーマがデータセット内において明らかになり「十分な量を得られた」と判断したところで、データの採集は終了した。具体的には「パラリンピック競技大会の目的」「エリート障害者スポーツのための乗り物としての障害身体の適切性」「パラリンピック活動の未来における潜在的な発展」という3つのアプリオリなテーマを含む。分析の間にデータセットから出現したもう一つの経験的テーマは「IOCの影響力」と名付けられた。「エリート障害者スポーツのための媒体としての身体障害の適合性」のテーマから得られたデータについて、本論文で議論する。そしてデータを特定のテーマに割り当てたのち、ブルデューの社会学的理論(Bourdieu, 1984, 1997; Bourdieu & Wacquant, 1992)を利用して批判的に検証した。

パラリンピック競技大会において特定の身体を包含することの正当性に関して、本メソッドによって生み出された経験的データセットを詳しく調査する。始めに、脳性麻痺・重度の脳性麻痺・そしてその他の重度の障害を抱える人々を取り巻く諸問題について考察する。

次に、美学的思想の役割と、パラリンピック競技大会で重度の障害を抱える人々を受け入れることに対して美学的思想が及ぼす影響について検証する。

「障害のある」身体とパラリンピック競技大会

何人かのパラリンピック・ステークホルダー（関係者）はデータ集計の際に、パラリンピックスポーツ関係者の資本(Bourdieu, 1997; Bourdieu & Wacquant, 1992)の観点から見ると、選手たちのなかには他の選手よりも儲けている者がいるかもしれないことを認めた(Abberley, 1996; Bertling & Schierl, 2008)。また、様々な身体障害を持つ人々の適合性や「価値」に関する差別的認識について、詳細にインタビュー内で議論を行った。特にインタビュー回答者たちは、脳性麻痺や、より重度の障害を抱える人の社会的認知および受容を取り巻く諸問題を強調した。彼らはパラリンピック競技大会参加者に含まれている一方で、そのパフォーマンスは審美的に喜ばしくないと考えられていた。

[脳性麻痺を持つ選手]

パラリンピック・ステークホルダーの中には、優秀なスポーツ遂行者として認められるための技量について、脳性麻痺を抱える選手のパフォーマンスに問題があると感じる者もいた。脳性麻痺患者のスポーツ理事であるパトリックは、陸上競技の観点から、脳性麻痺を抱える選手の市場価値は高くない(Abberley, 1996)という考え方を表した。

陸上競技において、正直に言うと彼ら[脳性麻痺を抱える選手たち]が認めてもらえるとは思わない。車いす陸上競技や切断手術を受けた者たちが認められる傾向にある。何故なら、彼らの方がマーケティング的により「好ましい」と考えられるからである。カラフルで派手な車いすに座っている人は、格好いい装置[gear]に囲まれているように見える。また、最新の義足を身に付けている人は、役割に合った格好をしているように見える。脳性麻痺を抱える人は、ぎこちなく見えるのだろう、いや、ぎこちなく見えるのである。恐らく市場で売り出されるための型を持っていないだろう。(パトリック)

過去のスポーツ経験から蓄積されたパトリックのスポーツ的ハビトゥスは、障害の状況下で達成したスポーツ・パフォーマンスよりもむしろ、市場性に基づいて、選手たちをクラス分け分類していることになる。パラリンピック・スポーツ理事のトレバーは、脳性麻痺を抱える選手に関して「脳性麻痺やさらに重度の障害を抱える選手は、報道機関やその他のメディアにとって理解し難いイメージなのである」と述べた。つまりトレバーは「障害のあるスポーツを行う」身体を持たない脳性麻痺患者の認知と、メディアの理解およびエリートの陸上競技パフォーマンス像の間にある混乱や衝突を表現しているようにみえる。これは、パラリンピック選手の、特に経済資本と象徴資本という付随収益の獲得に不可避的な影響を及ぼす。【本論文の著者のパーデュューとハウの暮らしている】イギリスのような現代の西洋

社会において、メディア報道はこれら資本の獲得を手助けしうるものである。

IPC もメディアと一緒に、脳性麻痺を抱える選手が疎外されていることに対して責任を負う、と主張する者もいるだろう。もし IPC がより多くの脳性麻痺を抱える選手をメディアに露出させていれば、彼らのような「障害のある」身体に対する社会の受け取り方を、エリート的スポーツの水準で戦う「障害のあるスポーツを行う」身体の“実行可能でお墨付きを得ることができる好例”へ変えることができたかもしれない。

しかし、パラリンピック・スポーツに与えられるメディア報道量は、メディアが「障害のある」身体を正しく評価せずプロモーションも行わないために減少していくだろう。メディアは「障害のある」身体に対して、エリート的スポーツ・パフォーマンスの代表として認知されるために必要なものがないと感じている。メディアとスポンサーが IPC に仕切られているもの以外のスポーツと連携を取る一方で、パラリンピック・スポーツに与えられている限られた量のメディア報道を【さらに IPC が】失うこと(Howe, 2008b; Schantz & Gilbert, 2001; Thomas & Smith, 2009)は、IPC がパラリンピック競技大会を演出しプロモーションを行う力を劇的に弱めるだろう。我々は、メディアとスポンサー企業が IPC に重大な影響を及ぼすポジションを占めていると考える。つまり、【メディアとスポンサーは】メディアからの注目が低下することに繋がる可能性があるため、脳性麻痺を抱える選手を商業的ロールモデルとして押し出すという重大なリスクを、IPC が冒さないように仕向けているのである。メディア・コングロマリットの資本供給源は IPC とパラリンピアン達を支配するが、この支配力および影響力を持つ覇権的ポジションは、個人の持つハビトゥスが伝達・受容する価値やメッセージを受け入れることを通してのみ維持される。したがって観客らの間では、ほとんど間違いなく、既に蓄積された多国籍メディア企業の資本供給源と同じくらい重要なのである。このような脳性麻痺を抱える選手に加えて、さらに重度の脳性麻痺や他の重度の障害を抱える選手の市場性に関しても、パラリンピック・ステークホルダーと幅広く議論を重ねた。

[重度の脳性麻痺を持つ選手]

パラリンピック・ステークホルダーは、重度の脳性麻痺を抱える選手について、パラリンピック競技大会のようなエリート的障害者スポーツイベントの演出やプロモーションで利用するにあたり、潜在的に問題解決が困難な「障害のある」身体であると強調した。例えばグレイムにとって、パラサイクルの観点から見ると、重度の脳性麻痺が何人かの【重度の脳性麻痺を持つ】パラリンピアン達の技術的能力に多大な影響を及ぼしていることは明白な問題であった。グレイムは身体的に健常な学者であり、2000年のシドニーパラリンピックにてパフォーマンスの向上を援助する目的でイギリスのパラサイクルチームと協力した経験がある。重度の脳性麻痺を抱えるサイクル選手の身体能力に関する重大事項のひとつは、選手が競うコースが、技術的にそれほど厳しくないものでなければならない点である。重度の脳性麻痺を抱える選手がコースに順応できなければ、彼らは他の選手と並んで競い合う

ことができない。グレイムは次の通り言及する。

例えば、器材面での問題がある。[重度の脳性麻痺を抱えるサイクル選手にとって]高い技術を求めるようなコースであれば、競技に参加させることができない。あるいは、重度の脳性麻痺を抱え三輪に乗ったサイクル選手のために、技術的に容易なコースにしなければならない。

ハビトゥスに蓄積された自身の過去の経験を振り返った場合、観客はこのようなコースの違いをより簡単なチャレンジであると見做すかもしれない。結果的に重度の脳性麻痺を抱えるサイクル選手のスポーツ能力を過小評価しているのである。しかし、もし重度の脳性麻痺を抱えるサイクル選手がパラリンピック競技大会において他の選手と同じ会場で競うことができなければ、彼らのスポーツ能力はさらに区別され、その功績も人々の注目を浴びることなく、異なる会場や機会へ疎外されるのである。他の選手から重度の脳性麻痺を抱えるサイクル選手を引き離すことは、特定の選手が追放され、他の選手より劣っていると考えられるため、彼らが共有する文化資本の土台を壊すことになるであろう。パラリンピック競技大会においては、スポーツの要求の間にあるバランスを模索する緊張感が存在する。十分に挑戦的で高水準のパフォーマンスを叶えつつも、その要求が障害の影響で克服できなくなるほど困難なものにならないよう保証しなければならない。

重度の脳性麻痺を抱えるサイクル選手を「障害のあるスポーツを行う」身体として認めさせる試みを取り巻く諸問題も、グレイムにとっては明白であった。彼は次のように述べる。

重度の脳性麻痺[を抱えたサイクル選手]を競争力があるように見せるには、少し問題がある。重度の脳性麻痺患者の世話をする人々でさえ、できる限り後押しをしない傾向があるかもしれない。

観客は脳性麻痺を抱えるサイクル選手をエリートスポーツマン／スポーツウーマンの代表として認めない一方で、重度の脳性麻痺患者を支援する人々のハビトゥスは、彼らが激しいトレーニングを行い競争することを望んでいない可能性がある、とグレイムは主張する。代わりに支援を行いたいと思っており、結果として重度の脳性麻痺を抱える人に対してより受動的でケアを中心としたアプローチが取られるのである。それはほぼ間違いなく、エリート選手になるために求められる自己犠牲的なライフスタイルとは真逆である。この考えは、より受動的な環境や、あるいは病院やリハビリテーション施設などの医療的環境において重度の脳性麻痺を抱える患者と交流した過去の経験のみを持ちながらパラサイクル選手たちと仕事を行う人々から発せられたものであろう。これらの経験はハビトゥスの中に深く根付いており、重度の脳性麻痺を抱える人々に対する姿勢を形作り、また今後の態度に影響を及ぼすために使用される。しかし、障害のあるエリート選手のトレーニングを取り巻く、

これまでに得られたスポーツ科学的証拠は不足している。この不足は重度の脳性麻痺を抱える選手が潜在能力の限界までパフォーマンスを行うことを、後押しする際に抱くためらいや用心の主な原因となっているかもしれない。

この問題に関して、重度の脳性麻痺を抱えながらも水泳選手として2000年シドニーパラリンピックに出場し、2008年北京オリンピックでは理事アシスタントとして従事したミッシェルは、次のように語った。「ボッチャ選手には常に付添人がついていて、それは他の選手の自主性を脅かすのだろうか？」換言すると、このような援助はボッチャ選手や他の高度な支援を必要とする選手たちが、障害を抱えるエリート選手として認められるのを困難なものにするかどうか、ということである。ボッチャの付添人の例にみられるようなサポートスタッフは密かに存在しており、エリートの健常者スポーツと障害者スポーツの両方において区別される。例えば、健常者テニスと障害者テニスでは、選手の試合中にコーチングを行うことは禁止されている。しかし、健常者サッカーと障害者サッカーでは、コーチがピッチのそばでチームに指示を送る姿が頻繁に目撃される。場所と付添人の重要性を他のスポーツの状況に当てはめることにより、スポーツにおける付添人の正当化を促し、ボッチャ競技で健常者の付添人が障害を持つスポーツマン／スポーツウーマンを援助する姿を通して続いていたパターンリズムのイメージを減少させることに繋げることができるかもしれない。

重度の脳性麻痺を抱える人々が試合の中心となるパラリンピック競技である「ボッチャ」は、重度の障害を抱える人々について議論する際にしばしば焦点として取り上げられた。ボッチャの試合はボールゲームやローンボウリングのように、技術力を競うゲームである。これらのゲームでは、肉体的適応力は最小限で済む。多くの点で、ボッチャの認識のされ方および受け入れられ方は、パラリンピック競技大会において重度の障害を抱える全ての選手に対する認識と同義であると見做されるようになった。これは、他のスポーツにおいて、重度の脳性麻痺を抱える選手の数が少ないことが大きな理由となっているようであった。ボッチャは、障害よりも技術に焦点が当てられるスポーツ環境において、重度の脳性麻痺を抱える人々が能力を発揮できることを目的とするパラリンピック競技の一例なのである。

ミッシェルはインタビューにおいて、ボッチャ選手がアスリートとして明らかに認められておらず、それは(ボッチャという)スポーツとその参加者たちがパラリンピック競技大会において疎外されていることに原因がある、と強調した。2000年と2008年のパラリンピック競技大会における経験から、彼女はこう述べた。

ボッチャ選手に関するコメントはほんの少ししかなかった。「彼らはアスリートのようには見えない」と。それは【コメントする側が】知識が足りなかったり、無知であるせいだ。他のスポーツ畑から来たとある関係者の一人が無作法な発言をして、私は少し彼に異議を唱えた。だが、彼の考えを改めさせることができたとは思わない。

ミッシェルは、ボッチャ選手のライフスタイルをよりスポーツマン／スポーツウーマンとして認識されるものにする戦略について「[カナダ国内の]ボッチャ競技を組織的に管理しているカナダ脳性麻痺スポーツ連合(Canadian cerebral palsy sport association)は、ボッチャをよりプロフェッショナルなものにしようと働きかけており、またそれを正当なものにするために、トレーニングプランやコーチの調整など全てを行っている」と述べた。この【他の競技にボッチャを似せようとする】儀礼的なやり方によって、ボッチャ選手が優秀なアスリートとして認められるようになるのかどうかは、疑問の余地が残る。加えて、特定のタイプの身体であることや審美的な身体であることが、スポーツの法則によって定められている通りに“成功を取めた功績と同じくらい重要である”と考えられるのであれば、スポーツでの優秀さに関して、どのようなメッセージが運ばれるのだろうか。これは、(例えばビーチバレーボールのような)女性アスリートを含む特定のスポーツにおける顕著な懸念事項と類似している。そのようなスポーツにおいて優秀な女性アスリートの身体をメディアが性的対象化させることは、スポーツの性質よりも肉体的性質のほうが注目的になっていることを意味する。パラリンピック競技大会において、魅力的で審美的に好ましい身体に対する認識は、重度の障害を抱えるスポーツマン／スポーツウーマンのメディア化にとって新たに発生した障壁と考えられるだろう。1990年代前半から2000年代中頃までパラリンピック車いすテニス選手として活躍したジャックは、インタビューの中で、適切にスポーツ特有の“エリートなアスリートの定義”を予想した。

彼ら[ボッチャ選手たち]にとって、ボッチャは技術のスポーツだ…私は技術を目の当たりにした。彼らの持つ身体機能から考えると、彼らができることや達成できることは驚くべきものだ。匹敵するものがあるだろうか。車いすラグビーと車いすバスケットボールを例にとるが、これら2つのスポーツはそれに匹敵するだろうか。あるいは、障害のレベルのせいで異なっているのか？つまり、誰がそれを見ているのか、そして誰の目を通して何を描こうとするのかにかかって異なっているのである。

結果的にジャックは、障害者スポーツを含む様々なスポーツにおいて、エリート的スポーツパフォーマンスを構成するものに洗練された区別をするための、個人のハビトゥスの必要性について、繰り返し訴えている。これなしには、パラリンピック競技大会における重度の脳性麻痺を抱える人々や高度な支援を必要とする人々のインクルージョン<包括性>(IPC, 2011d)は、うまくいかないのである。

[その他の重度の身体障害を抱える人々]

何人かのパラリンピック・ステークホルダーは、重度の脳性麻痺のみならず高度な支援を必要とする他のアスリートたちによるパフォーマンスの社会的受容における影響と関連して、より一般的な重度の障害をどのように認識しているかについてコメントした。元パラリ

ンピック陸上選手のダニエルは、「常に困難は存在しており、高度な支援を必要とする人が持つ能力を一般人が認めることは難しい。時々、私自身にとっても難しいのだ。」と述べた。

メダルをいくつも勝ち取った元パラリンピック水泳選手のテレサは、重度の障害のせいで、自身のパフォーマンスが劣っていると感じていた。彼女が所属していた下位クラスの水泳選手がパラリンピック競技大会にて泳ぐことを許されていた短い距離は、彼女の障害と対になっていた。そしてその障害は、価値の低いスポーツ・パフォーマンスとして認識する者もいるかもしれないであろうものを示すために組み合わせられたのである。

私は、クラス 5 以下 (1~5) に所属する我々にとって、あたかもメダルを獲得することが比較的簡単であり、それほど長い距離を泳ぐ必要がないがために、我々のメダルはどことなく価値が低いと思われるかのようにつねに感じてきた。私も当該諸クラスに所属する他の選手も、そのように考えたことは決してなかったが、他の水泳選手や観衆がときどきそのように思っていることは、確かに感じる事ができた。(テレサ)

より重度の障害を抱える下位の諸クラスにおける、知覚された象徴資本の欠如は、議論の余地はあるが、「障害のあるスポーツを行う」身体を持つと認識されることについての、知覚された不可能性に由来しているだろう。披露されるパフォーマンスは、“象徴資本を割り当てるために必要である”と我々のスポーツハビトゥスが見做す必須要素を生み出すことができていると認識される。結果として、パラリンピック競技大会の、重度の障害を持つ選手に対する包含性 (インクルージョン) は、傷つきやすいもの (ヴァルネラブル) にみえるのである。特に、彼らのパフォーマンスを通して作り出されるであろう経済資本が限られたものであることを考慮する場合に、このことは顕著となる (Brittain, 2010:120-121 を参照)。この点に関して、テレサは次のように述べる。

私のような障害レベルを抱える人々にとって、旅行は高くつくものである。何故なら多くの場面において、同伴し援助してくれる人が必要だからだ。つまり、飛行機に同伴して代金を支払う人が必要になるのだが、私はここに「他店より安いお買い得価格」という問題が発生してくると思う。一群の人々がいて、同伴してくれるという。そのとき、コストはどれほどかかるのか？ 最も費用対効果の高い方法ですませるやり方はどのようなものか。じっさいのところ、他人のサポートを必要としないアスリートのグループに同伴してもらうことがある。これが、パラリンピック・スポーツの未来を私に憂慮させる。何故なら、私にとってのパラリンピック・スポーツの最大のポイントは幅広い多様性を生み出すことであるが、巨大なスポンサーが参入するにつれてそれが少しずつ破壊されていると思われるからである。

スポンサーを得ることの重要性に注目が集まる一方で、多くの形の資本を求めること、そ

れに続く利益と力を求めることは、ほぼ間違いなく、全てのパラリンピック・ステークホルダーの間に根付いている傾向だろう。個人も団体も、経済資本、社会資本、文化資本のうちどれを引き換えにしようが、利益を獲得することを目指す。この点に関して、美学に起因する社会的価値は、パラリンピック・ステークホルダーによる、「障害のある」身体および「障害のあるスポーツを行う」身体に対する認識において、重要なものであった。この問題を今から取り扱う。

審美的に好ましいパラリンピアン達

インタビューを実施した人物の中には、競技中にある一定の身体を他の選手より審美的に好ましいもの（心地よいもの）と認める“ボディ・ファシズム”(Abberley, 1996; Bertling & Schierl, 2008)にパラリンピアン達がさらされていると考える者もいた。“審美的に好ましい”という定義は主観的であり、したがって絶対的な定義を与えることは難しい(Bertling & Schierl, 2008;; Stone, 1995)。審美的に好ましいスポーツ・パフォーマンスとは、しばしば、スピード・持久力・強靭さ、あるいはそのスポーツ特有の卓越性に関する達成における高い技術レベルのうち、一つあるいはそれ以上の特性を誇示しながら、意図的で制御された肉体的動きをすることを表す。インタビューを実施した人々にとって、この広範な定義は、審美的に好ましいパフォーマンスの解釈に役立つものであった。自国のパラリンピック委員会の理事のドナルドは、以下のように述べた。

車いすアスリートは自分自身が、パラリンピック・ムーブメントおよび義足選手の頂点に位置していると自覚している。明らかな障害を持つアスリートと、脳性麻痺を抱えたアスリート、そして特に重度の脳性麻痺を抱えたアスリートは、その頂点から少し離れた位置にいる。これは、彼らが競技中にどれほど審美的に好ましい存在となっているか、という論点に帰着する問題だ。

この審美的ヒエラルキー問題は解決が困難であり、「障害のあるスポーツを行う」人に反して、「障害のある」人のスポーツ・パフォーマンスに割り当てられる信頼性と資本価値を妨げる。

2000年シドニーパラリンピックに出場した経験を持つ元車いすバスケット選手のアビゲイルは、パラリンピック競技大会をメディアとスポンサーにとって受け入れられるように描くことの重要性を強調し、次のように述べた。「私は、人々はまず初めに障害に注目するのだと思う。そして障害者アスリートにそれほど関心を示さないスポンサーのような人々に、(障害ではなく)スポーツに初めに注目させることは難しい。彼らは未だに美的魅力を求めており、適切に動かない身体を持つ人は求めているのである」。ここでアビゲイルは挑発的に、重度の脳性麻痺に関連する美学の重要性を再確認しているように見える。また彼女は「障害のある」身体と、豊かな資本および市場性を持つと認められうる「障害のあるス

ーツを行う」身体の違いについて、少しずつ解き明かしている。

テレサの経験では、審美的に好ましいスポーツ・パフォーマンスを披露することは、下位クラスに在籍する水泳選手のパフォーマンス価値を明らかにするために必要不可欠だと考えられていた。

抱えている障害が見えづらい水泳選手は、メディアの大のお気に入りだった。かなり重度の障害を抱える我々のような人物は、メダルの観点から見ると非常に成功しており、それが全てであるはずにも関わらず、のけ者にされた…社会がより審美的に好ましいと考える水泳選手たちが得た大きな価値に対して、より重度の障害を抱える我々が得た価値はずっと少なかったのである。

ミッシェルも同様に、より健常者の身体に近い選手も含めた上位クラスに所属する選手とのレースは、よりスポンサーとメディアに対してアピールできるものであると考え、「私は、[上位クラスは下位クラスの競争に比べて]恐らくより市場性が高いのだと思う。タイムがずっと速く、人は『これこそ水泳のあるべき姿だ』と言うのだろう」と述べた。ここでも改めて、過去のスポーツ経験と知識から生まれるハビトゥスの重要性が、障害を抱える特定の人びとが披露するパフォーマンスの受け取り方に影響を与えていることを確認できる。

ポールは、パラリンピック競技大会におけるパフォーマンスをエリート的スポーツの代表例として描くことが、IPC とメディア組織に要求されていると述べた。彼は、1980 年代後半の車いすレースにおけるパラリンピック金メダリストである。彼は「人々は、重ね合わせることができる達成を探している。つまり彼らは、オリンピック選手たちと重ね合わせることができるパフォーマンスを行う最高のアスリートを観たがっているのである。障害の度合いが重い選手や見た目があまり魅力的ではない選手は、【人々が見たがっている範囲の】底から落ち始めているのかもしれない」とコメントした。一方パドレイグは、健常者に近い選手として紹介できる程度の障害を抱えるスポーツマン／スポーツウーマンのメディアに対するアピールについて補足した。彼は、1992 年のパラリンピック競技大会で複数メダルを勝ち取った元水泳選手であり、現在は障害者スポーツの理事である。彼は「障害が少ないほどより多くの注目を集めることができ、それは本流のスポーツにより少しでも近いことが理由だと推測する。障害が多いということは、スポーツが選手に順応しなければならないことを意味し、伝統的な競技からは遠く離れているのだ」と述べた。本流のエリート(有能な体の)スポーツの性質と見栄えは、個人のスポーツハビトゥスにおいて基準点を提供する。その基準点と障害者スポーツが比較されるのである。エリート的スポーツ・パフォーマンスのモデルとして見做される「障害のあるスポーツを行う」身体から生まれる資本概念は、ドナルドが述べた、車いすバスケットボールがエリート的スポーツとして幅広く受け入れられている裏側にある論拠において顕著であった。

我々がよく見かけるアスリートたちは、抱えている障害が小さく、より高いレベルで競技を行っている…[車いす]バスケットボールは、人々が「ああ、わかるよ」とリンクさせることができる競技だと思う。選手たちは脚を動かすことができないがそれ以外の部分に問題はなく、上半身の立派な筋肉や全てが、スポーツマンと見做される要素とぴったり合うのだ。

結果的に、車いすバスケットボール選手の身体的能力が、エリートで健常なスポーツマン／スポーツウーマンに与えられる象徴資本へのアクセスを可能にしているというのである。

上記の経験的エビデンスに基づくと、重度の障害を抱える選手のスポーツ・パフォーマンスは、本当らしいエリート障害者スポーツマン／スポーツウーマンとして認知および描写されることに起因する資本を生み出そうと試みる際に、最も問題になる。従って「障害のあるスポーツを行う」身体を持つと見做されるパラリンピアンたちと、そうは見えない者たちとの間にある格差は、パラリンピック競技大会における重度の障害を抱える選手たちのポジションを潜在的に脅かすのである。

IPC のビジョンとミッション—再訪問

IPC がビジョンとミッションに関する明白な問題に面しているのは、これまでに議論した経験的エビデンスから見て明らかである。前述した通り、IPC のビジョンはスポーツにおける優秀性を叶えることの支援を含む。これは、スポーツを中心に据えた組織の目標である (IPC, 2011c)。しかし、あるパラリンピアンがスポーツにおける優秀さが認識されそなったり、あるいは、他に帰されたりするのであれば、それは問題だ。中でもとりわけ、ボッチャ選手のスポーツの才能や優秀さが認められ報われるためには、そのスポーツ特有の「エリート」の定義が求められる。さらに、たとえボッチャ選手が彼らのスポーツにおいて高い能力を披露していると認められたとしても、そばにいる付添人のせいで彼らの優秀さはある程度、自身のみならず付添人のおかげでもあると見做されてしまうのは明らかであった。

重度の脳性麻痺や重度の障害を抱える選手は、メディアの報道やスポーツの消費者からの注目を獲得するために審美的に好ましいやり方でパフォーマンスを披露しているとは思われ得なかった。つまり、その「障害のある」身体を通して、エリートの障害者スポーツとしてのパラリンピック・ブランドを売り永続させることには失敗していたのである。結果として、IPC のミッションの2つの重要な側面、すなわち全てのレベルおよび全ての制度において、スポーツで高度な支援を必要とするアスリートたちのための機会を発展させることと、パラリンピック活動に関する継続的な世界的プロモーションとメディアの報道を追い求めること (IPC, 2011c) は、両立不可能であることが立証されるのだ。

IPC は、比較的重度の障害を抱える選手たちが、本当らしい「障害のあるスポーツを行う」身体としては認められないことを犠牲にして、娯楽的なショーを迫及しているのだろうか？明らかに IPC は、そのビジョンとミッション【の全部】を守り達成するという複雑な

試練に直面している。そのビジョンとミッションのうちいくつかは、メディアースポーツ間の生産複合体(Maguire, 1999)におけるスポーツの消費者を獲得する熾烈な争いの風潮の中で(Crawford, 2004)、両立不可能であるように見える。

独立したメディア記事を通したものであろうが連載もののメディア作品を通したものであろうが、メディアを通してパラリンピアンに触れる時、本論文は、彼らと彼らの身体がどのように描かれているのかについて考えるよう呼びかけるものだ。加えて、彼らのアイデンティティのうちどの部分が注目を浴びるのか、そしてメディア化された産物を通して、どのような付随的意味が変化し、定型化されていくのか(についても考えるよう呼びかける)。そうすれば、障害者スポーツにおいて功績を持つ人々に対する認識と、社会における障害の幅広い意味は公然と明らかになる。そして我々はソーシャル・アクターとして、スポーツの社会構造に参加する特定の個人が持つ社会的意味の建設における我々の役割に対して、敏感になるのだ。

本論文は、パラリンピック競技大会における、一見すると「障害のある」身体と「障害のあるスポーツを行う」身体を通して、はっきりと表される“障害とエリートスポーツの複雑さ”を証明するものである。明らかな重度の障害を抱えることは、「障害のあるスポーツを行う」身体を持つと見做されるための、個人の能力を減少させてしまうだろう。しかし、パラリンピック競技大会において出場資格を得た適格な選手になるためには、自身のスポーツ・パフォーマンスに重大な影響を及ぼす障害を持つと見做されなければならない。つまり、パラリンピック競技大会へ出場するため、そしてパラリンピック競技大会のプロモーションを行うためにはどのような身体が正統なのだろうか？これは、パラリンピック活動が直面している最も重要な問題であり、我々が、明らかな「障害のある」身体と「障害のあるスポーツを行う」身体が持つ重要性、および、その間にある関係性を社会においてより良く理解するためには、多くの調査が必要となるのである。

本論文においてなされたブルデュー的な理論と分析は、ノーマルとアブノーマルの二元論や逸脱理論からしばしば生み出される「その他」類型を避けながら、エリート障害者スポーツの観点から身体障害について、革新的な分析を行うのに役立った。【二元論で粗雑に議論してしまう】代わりに、全ての資本が争われるにしたがってより微妙な利益が与えられ、それは自身の中で変化の機会を開く。資本は相対的なものであり、個人が損失を免れるお守りではない。それゆえに、ブルデューはパラリンピック・スポーツとスポーツ全般に、彼らの性質と態度が生み出している様々な資本や関連物と大いに異なる、人々が属する様々なグループが再び作り直される可能性について、考える機会を与える。この資本のやり取りを明らかにさせる際に、ブルデューは多くの分析を容易にするレンズを提供してくれている。それにより、斬新で革命的ですらあるやり方で、スポーツを行う身体の意味を理解するための機会を与えてくれているのである。

深刻な障害を抱える人々のポジションを守る鍵は、現在の支配的な審美判断のために引かれた境界線というものを修正するための効果的な戦略にある、といえるかも知れない。身

体障害、感覚障害やあるいは知的障害などの様々な障害を抱える人々を包含するパラリンピック競技大会の「観客を楽しませるような性質 (spectatorship)」を疎外しないようにすることを優先させれば、状況は改善するかもしれない。それによって、パフォーマンスを行う身体の性質は、ライバルの選手と競うなかで披露するパフォーマンスに対して二次的なものになる。この比較は、注目度の高いオリンピック競技に参加する健常者アスリートのような文化および象徴資本と結び付けられる社会グループよりも、共に闘う相手の選手との間で行われなければならない。観客の注目を、所謂オリンピックにあたるものと切り離して、パラリンピック・パフォーマンスの価値に集中させるようにすることで、スポーツ愛好家たちのハビトゥスの中に、パラリンピック競技大会のための特別な場所を作ることができるかもしれない。エリートスポーツマン／スポーツウーマンが様々な身体をしており、それによってスポーツにおける優秀性が特定のスポーツと関連している (Purdue & Howe, 2012b) という認識を持つことは、スポーツ愛好家が、障害を抱える優秀なアスリートを含む多様な選手を積極的に受け入れる可能性があることの再確認に繋がるだろう。

原注

1. 脳性麻痺とは、出生時または出生直後に発生した脳損傷によって引き起こされる、身体動作および/または学習過程上の障害のことである。

文献表

- 【本「文献表」は英文の元原稿と同一であり、ブルデュー等の著作の邦訳には言及していない】
- Abberley, P. (1996). Work, Utopia and impairment. In L. Barton (Ed.), *Disability and Society: Emerging Issues and Insights* (pp. 61–79). London: Longman.
- Bailey, S. (2008). *Athlete-first: a history of the Paralympic Movement*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Bertling, C., & Schierl, T. (2008). Disabled sport and its relation to contemporary cultures of presence and aesthetics. *Sport in History*, 28(1), 39–50. doi:10.1080/17460260801889202
- Bourdieu, P. (1978). Sport and social class. *Social Sciences Information. Information Sur les Sciences Sociales*, 17(6), 819–840. doi:10.1177/053901847801700603
- Bourdieu, P. (1984). (Nice, R. (trans.)) *Distinction: A social critique of the judgement of taste*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Bourdieu, P. (1990). *In other words: essays towards a reflexive sociology*. Cambridge: Polity.
- Bourdieu, P. (1997). The forms of capital. In A.H. Halsey, H. Lauder, P. Brown, & A. Stuart Wells (Eds.), *Education: Culture, Economy, Society* (pp. 46–58). Oxford: Oxford University Press.
- Bourdieu, P. (1998). (Ferguson, P. (trans.)) *On Television*. New York: The New Press.
- Bourdieu, P., & Wacquant, L. (1992). The purpose of reflexive sociology (the Chicago workshop). In P. Bourdieu & L. Wacquant (Eds.), *An invitation to reflexive sociology* (pp. 61–215). Cambridge: Polity Press.

- Brittain, I. (2008). The Evolution of the Paralympic Games. In R. Cashman & S. Darcy (Eds.), *Benchmark Games: the Sydney 2000 Paralympic Games* (pp. 19–34). Sydney: Walla Walla.
- Brittain, I. (2010). *The Paralympic Games Explained*. London: Routledge.
- Clement, J-P. (1995). Contributions of the sociology of Pierre Bourdieu to the sociology of sport. *Sociology of Sport Journal*, 12, 147–157.
- CP-ISRA (2011). Classification Profiles. Available at: http://www.cpisra.org/files/classification/Classification_CPISRA_Brochure_Classification_Profiles.pdf. Accessed on 14/6/11
- Crawford, G. (2004). *Consuming sport: fans, sport and culture*. London: Routledge.
- Cregan, K. (2006). *The Sociology of the Body: mapping the abstraction of embodiment* London. Sage (Atlanta, Ga.).
- DePauw, K. (1997). The (In)Visibility of DisAbility: cultural contexts and ‘sporting bodies’. *Quest*, 49, 416–430. doi:10.1080/00336297.1997.10484258
- DePauw, K., & Gavron, S. (2005). *Disability Sport*. Leeds: Human Kinetics.
- Gilbert, K., & Schantz, O. (2008). (Eds.) *The Paralympic Games: Empowerment or Side show?* Maidenhead: Meyer & Meyer.
- Gratton, C. & Jones, I. (2004) *Research methods for sport studies*. London: Routledge.
- Guttmann, L. (1976). *Textbook of sport for the disabled*. Aylesbury: HM & M.
- Howe, P.D. (2008a) *The cultural politics of the Paralympic Movement: Through an anthropological lens*. London: Routledge.
- Howe, P.D. (2008b) From inside the newsroom: Paralympic media and the ‘production’ of elite disability. *International Review for the Sociology of Sport*. 43 (2), 135-150.
- Hughes, B., & Paterson, K. (1997). The social model of disability and the disappearing body: towards a sociology of impairment. *Disability & Society*, 12(3), 325–340. doi:10.1080/09687599727209
- IPC. (2011a). IPC. Available at: www.paralympic.org/IPC/. Accessed on 30/6/11.
- IPC. (2011b). IPC Sports. Available at: www.paralympic.org/Sport/IPC_Sports/index.html. Accessed on 30/6/11.
- IPC. (2011c). *Vision, Mission & Values*. Available at: http://www.paralympic.org/IPC/Vision_Mission_Values.html. Accessed on 30/6/11.
- IPC. (2011d). Athletes with High Support Needs Committee. Available at: www.paralympic.org/IPC/Organization/Standing_Committees/Athletes_With_High_Support_Needs_Committee.html. Accessed on 6/7/11.
- IPC. (2012) IOSD Sports. Available at: http://www.paralympic.org/Sport/IOSD_Sports/index.html. Accessed on 23/1/12
- I.P.C. Athletics. (2010). IPC Athletics Classification Handbook. Available at: http://ipcathletics.paralympic.org/export/sites/ipc_sports_athletics/Classification/2010_07_16_IPC_Athletics_Classification_Handbook_2006.pdf Accessed on 14/6/11.

- I.P.C. Swimming. (2011). IPC Swimming Classification Rules and Regulations. Available at: http://www.ipc-swimming.org/export/sites/ipc_sports_swimming/Classification/2011_05_30__Swimming_Classification_Regulations.pdf Accessed on 11/6/12.
- Laberge, S., & Sankoff, D. (1988). Physical activities, body habitus, and lifestyles. In J. Harvey & H. Cantelon (Eds.), *Not Just a Game: Essays in Canadian Sport Sociology*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- Maguire, J. (1999). *Global Sport: identities, societies, civilisations*. Oxford: Polity.
- Mahar, C., Harker, R., & Wilkes, C. (1990). The basic theoretical position. In R. Harker, C. Mahar, & C. Wilkes (Eds.), *An introduction to the work of Pierre Bourdieu: the practice of theory* (pp. 1–25). London: Macmillan.
- Morse, J., & Richards, L. (2002). *Readme first: for a user's guide to qualitative methods*. London: Sage.
- Paterson, K., & Hughes, B. (1999). Disability studies and phenomenology: the carnal politics of everyday life. *Disability & Society*, 14(5), 597–610. doi:10.1080/09687599925966
- Purdue, D.E.J., & Howe, P.D. (2012a) Empower, inspire, achieve: (dis)empowerment and the Paralympic Games. *Disability & Society* 27 (7): 903-916.
- Purdue, D.E.J. & Howe, P.D. (2012b) See the sport, not the disability? – Exploring the Paralympic paradox. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*. 4(2): 189-205.
- Schantz, O., & Gilbert, K. (2001). An ideal misconstrued: newspaper coverage of the Atlanta Paralympic Games in France and Germany. *Sociology of Sport Journal*, 18, 69–94.
- Shilling, C. (2003). *The Body and Social Theory*. London: Sage.
- Stone, S. (1995). The myth of bodily perfection. *Disability & Society*, 10(4), 413–424. doi:10.1080/09687599550023426
- Thomas, N., & Smith, A. (2009). *Disability, Sport and Society*. London: Routledge.
- UCI. (2011). UCI Para-cycling Classification Guide. Available at: <http://www.uci.ch/Modules/BUILTIN/getObject.asp?MenuId=MTI2MzI&ObjTypeCode=FILE&type=FILE&id=NjA1ODg&LangId=1>. Accessed on 14/6/11.
- Wacquant, L.J.D. (1992). The social logic of boxing in black Chicago: towards a sociology of pugilism. *Sociology of Sport Journal*, 9, 221–254.

【注記：本論文の翻訳権に関しては翻訳権授与権者から以下の承諾を得ている】

From *Sociology of Sport Journal*, 2013, 30(6): 24-40, <https://doi.org/10.1123/ssj.30.1.24>.

© Human Kinetics, Inc.

Translated into the Japanese language with permission of the authors and publisher, Human Kinetics, Inc. (www.humankinetics.com), which accepts no responsibility for the accuracy of the translation.

[訳者解説——出典と解題] (檜田美雄)

1. パーデュー&ハウ (2013) の出典について

本誌(『現象と秩序』第13号)で今回翻訳したこの論文の出典は、以下の通りである。
David E.J. Purdue and P. David Howe, 2013, "Who's In and Who Is out? : Legitimate Bodies Within the Paralympic Games," *Sociology of Sport Journal* 30(6): 24-40.

翻訳権は掲載誌の会社より正規に取得した。

2. パーデュー&ハウ (2013) の主張のポイントについて

本論文の概要を知るのには、上記訳稿の全体あるいは英文本体の全体を読んで頂くのがよりよいとは思われるが、解説に必要な範囲でポイントをかいつまんで記すと以下のようになる。

すなわち、パラリンピック競技大会を主催している国際パラリンピック委員会(以下、IPC)は、みずからの方針の中に大きな矛盾を抱えている。どういう矛盾かという、IPCは、一方では、すべての障害者に差別なくスポーツ選手になる機会を与えることをミッションとしているが、その一方で、メディアに対して働き掛けて、世界的規模でのパラスポーツのプロモーションをも成功させなければならない。けれども、この2つのミッションの同時達成は、困難である。なぜなら、ひとびとは、脳性麻痺者をはじめとした重度の障害者の身体については、それを、スポーツをする妥当な身体とみなすようなハビトゥス(習慣的蓄積)を持っていないからである。パラリンピックを観戦する観客は、車椅子バスケットボール選手についてならば、その上半身に注目して「スポーツをする障害者身体」とみなすことができるが、障害レベルによるクラス分けで下位のクラスに位置する重度障害の障害者水泳選手や、脳性麻痺者であるボッチャのプレーヤーについては、支援の対象であるというイメージを払拭できない。したがって、マスメディアによる露出も、どうしても見栄えのよい「障害者スポーツ選手」に偏ってしまうことになる。

対策としては、人びと(観客)のハビトゥスを変更して、どこを見て、何を楽しむのか、という注目の対象を変えていくことが考えられるが、スポーツ観戦者は障害者スポーツばかりを見ているわけではないので、マーケティング的にそのような誘導は困難であることが予想される。

3. パーデュー&ハウ (2013) の意義について (1)

ざっと、上記のような議論が展開されている。この論文が書かれたのは、2013年であり、2012年のロンドンでのオリンピック・パラリンピックの直後である。その後、ブラジルのリオデジャネイロでのオリンピック・パラリンピックがあり、2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されるはずであった(実際には、2020年の東京オリンピック・パラリンピックは、2021年夏に延期されている)。

東京パラリンピックの前宣伝は多様に展開されており、ボッチャの体験会なども繰り返

し開催されている（たとえば、神戸社会福祉協議会主催で神戸学園都市でも開催されている <https://participation.tokyo2020.jp/jp/event/detail.html?id=a090I00001L5mGhQAJ>）. それでも、「人びとのハビトゥスが変化」して、ボッチャ人気が沸騰した、ということにはなっていない。したがって、本論文の現代批評的価値、同時代的価値は未だ失われていない、というべきであろう。

4. パーデュー&ハウ（2013）の意義について（2）

いやむしろ、本論文の価値は、2020年1月31日のあの事件によって、さらに高まっているようにも思われるのである。

この事件については、『スポーツ社会学研究』28巻2号に掲載した「スポーツ社会学が実践の学になるための2つの方法」（樫田，2020b）中に比較的詳しく書いたので、詳細はそちらを見て頂きたいが、2020年1月31日に国際パラリンピック委員会（IPC）が国際車椅子バスケットボール連盟（IWBF）に当てて出した声明こそは、「誰がパラリンピック競技大会に出るための適格な身体を持っている、というべきなのか」という本論文のテーマそのものにかかわる声明であった。

すなわち、IPCは、現行のIWBFによる選手のクラス分け認定のままでは、レベル的に軽度のクラス分け部分において、パラリンピックへの参加がふさわしくない人びと、健常者に近すぎる人びとが出場することになるので、東京パラリンピックでの車椅子バスケットボールという競技の開催は認められないという主張をしたのである（IPC，2020）。これに対し、IWBFは、自分たちには自分たちの「哲学」がある、という半ば反論的声明文をHPに掲載した（注1）。

この事件に関するひとつ目の解釈は、本訳文すなわち、パーデュー&ハウ（2013）での主張にそった、原則的な対応をIPC側が行おうとしたのに対して、IWBF側がマーケティング的観点から、横紙破りを持続しようとした、というものだろう。つまり、見た目の華やかさを志向して、健常者に限りなく等しい選手をプレーヤーとしてスターとして遇しようとしているIWBFに対して、障害者のためのスポーツ祭典である、というパラリンピック競技大会の理念を守ろうとIPCが頑張った、という解釈である。日本の報道の中にも、そのようなトーンでの報道が散見された。

しかし、もうひとつの解釈も成り立つのではないだろうか。つまり、マーケティングを意識したアクターとして、IWBFだけを考えるのではなく、IPCもまた、マーケティングを意識して行動したアクターの一つである、と考えるストーリーもまた、成り立つように思われるのである。樫田（2020b）では、この立場にたって、すなわち「パラリンピックによる、積極的オリンピック補完策宣言説」というような立場にたって、議論を展開した。以下、その議論のエッセンスを再掲する。

他にもたくさんの国際的な障害者スポーツ大会があるなかで、観客動員数の観点からはパラリンピック競技大会が図抜けて大きな大会に成長してきている。これは事実である。そ

して、そのように成長することができた要因としては、名称からも推測できるように、オリンピックの同位対立物である、というイメージ戦略に、パラリンピック競技大会が成功したからとも言えるのではないだろうか。そして、もし、この推論にある程度の正しさがあるとすれば、どんな個別競技にせよ、クラス分け規則を徹底することによって、単に、同一クラスに所属している障害者間での競技性を保障するだけでなく、最軽度のクラス分け所属であったとしても、しっかりと健常者の排除ができていて、という「障害者としての質の保証」をも達成させることができるはずであり、その達成こそは、パラリンピック競技大会が、オリンピックのカウンターパートであるという、国際イベント的ポジションを維持し続けるために必要かつ重要なことである、という意識を、IPC 理事会メンバーが強く持つようになってきたとしても当然なのではないか、と思われるのである (IPC n.d.)。

つまり、障害レベルによるクラス分け規則が存在する意義が、近年、マーケティング戦略上変化した、可能性があるとも思われるのである。したがって、従来は、見て見ぬふりをしていた IWBF のゆるやかすぎるクラス分け規則についても、管理強化を行ったのではないかと、とも思われるのである。榎田 (2020b) では、この後者の解釈を採用したときに、パラリンピック競技大会が得ることができるものが増大するだけでなく、失うものもかなりあるのではないかと、という観点から議論を展開したが、その詳細は、榎田 (2020b) を見て頂きたい。

本訳稿との関係でいえば、ある種の可能性の見落としを、(上述の第二解釈において) 国際パラリンピック委員会がしてしまっている可能性があるだけでなく、パーデュー&ハウ (2013) もしてしまっているのではないかと、という点が重要だろう。

ブルデュー系の用語を用いるのなら、「ハビトゥス」の変化は、「ボッチャ的アスリートの優秀さ」を発見するための変化として将来やってくるのが期待されているだけでなく、「車椅子バスケットボールにおけるチームプレーの洗練の程度」を発見するような変化として、すでに達成されている可能性もあるのではないだろうか。そのような可能性をも指摘しておきたいのである。

少し、具体的に述べておこう。車椅子バスケットボールの面白さについては、渡 (2012) で多様に述べられているが、そこには、一般的スポーツ選手が持っている特質である「力強さ」や「敏捷さ」とは別種の特徴に基づいた面白さも述べられている、というべきである。たとえば、車椅子バスケットボールが、同じだから違う、という特質をもっていることに伴う面白さ (つまり、普通のバスケットボールコートと同じ広さのコートと同じゴールリングの高さを、車椅子バスケットボールプレーヤーが用いて、類似のゲームを、違ったゲームとして行っていることの面白さ、のようなもの)。コート内にいる選手の持ち点の合計が、14点以内でなければならないことに由来する、チームプレーの戦略性に伴う面白さ。(たとえば、高速で移動できる選手と低速でしか移動できない選手の両方がいるなかで、いかに攻撃と防御を最高度の効率で実施するか、最適設計をどう行うか、という面白さ)などを指摘できるだろう。

そして、このような面白さは、すでに、車椅子バスケットボールにおいて、楽しまれている面白さ、なのではないだろうか。それは、健常者スポーツに近似しているがゆえに楽しまれている面白さとは違うものなのではないだろうか。そういう点を、国際パラリンピック委員会も、パーデュー&ハウ（2013）も見落としているのではないだろうか。

5. おわりに

ここまで、今回翻訳をしたパーデュー&ハウ（2013）論文の標準的意義と現代的意義を簡単に述べてきた。しかし、この論文の意義は、さらに詳しく述べていくに価するものがあると思っている。この論文のキーワードに「包括性（インクルージョン）」があるが、パーデュー&ハウが述べているような、軽度障害だけでなく重度障害をも包括するべきだ、というような立場からの「包括性（インクルージョン）」の考え方以外に、「障害概念が当てはまる人間に楽しめるだけではなく、当てはまらない人間にも楽しめるものとして、障害者スポーツという概念を培っていくべきだ」という立場からの、つまりは、榎田（2020a, 2020b）のような立場からの「包括性（インクルージョン）」も考えられてよいはずだ、という、よりラディカルな議論との関係も考えられてよいだろう。

そのように考えて行くなれば、結局、障害の「社会モデル」をどこまで幅広く考えて行くことができるか、という問題に行き着くはずだ、という見通しを榎田は持っているが、この点については、次稿を期したい（注2）。

付記1

訳稿の部分の第二訳者として、平澤彩乃氏の名前を挙げている。氏は、現在、神戸市外国語大学の大学院外国語学研究科の2年生であるが、今回の翻訳にあたっては、出版社との交渉メールの原案の作成のほか、著者との連絡や下訳の作成など、大量の時間を費やして本訳業を支えてくれた。本翻訳がいささかなりとも読みやすいものになっているとすれば、その達成のかかなりの部分は氏の語学力と繊細さのおかげである。記して感謝したい。

付記2

この解説は、科学研究費補助金（課題番号 20K20782, 及び, 15H03411）による研究成果の一部である。

【注】

- 1) IWBF（2020）を参照せよ。
- 2) とはいえ、これまでも、類似の発想でいくらかの論考を書いてきた。藤野・榎田（2017）、および、榎田（2019）を参照せよ。

【文献】

- 藤野久美子・榎田美雄, 2017, 「ルールや環境から直接規定されないものとしての実践——女性競技者による車椅子バスケットボールの場合」『現象と秩序』7: 81-106.
- IPC n.d. 「How do Para sports ensure there is a level playing field between athletes with different impairments?」(IPC の WWW サイト中の『クラス分け: よくある質問』コーナーの冒頭部分) (<https://www.paralympic.org/classification/faq>, 2020 年 6 月 5 日確認)
- IPC, 2020, 「Wheelchair Basketball could lose Tokyo 2020 spot」(IWBF への通告内容) (<https://www.paralympic.org/news/wheelchair-basketball-could-lose-tokyo-2020-spot>, 2020 年 6 月 5 日確認)
- IWBF, 2020, 「IWBF Statement on IPC Classification Decision」(<https://iwbf.org/2020/01/31/iwbf-statement-on-ipc-classification-decision/>, 2020 年 6 月 5 日確認)
- 榎田美雄, 2019, 「障害社会学の立場からの障害者スポーツ研究の試み」榎原賢二郎編『障害社会学という視座——社会モデルから社会学的反省へ』新曜社, 65-87.
- 榎田美雄, 2020a, 「障害社会学の立場からの障害者スポーツ研究の試み——社会モデルを障害社会学的に乗り越える」(日本スポーツ社会学会第 29 回大会, 口頭発表 (WEB 発表), 2020 年 7 月, https://drive.google.com/drive/folders/1aeDlQf2_li2WDa8jFR3vn9h4-UY1LUBI?usp=sharing, 2020 年 7 月 4 日確認)
- 榎田美雄, 2020b, 「スポーツ社会学が実践の学になるための 2 つの方法——設計主義的思い込みから自由になること, 及び, シークエンスあるいはシステムへの注目」『スポーツ社会学研究』28(2): 43-56.
- Purdue, David E.J. and P. David Howe, 2013, “Who’s In and Who Is out? : Legitimate Bodies Within the Paralympic Games,” *Sociology of Sport Journal* 30(6): 24-40.
- 渡正, 2012, 『障害者スポーツの臨界点——車椅子バスケットボールの日常の実践から』新評論.

【編集後記】『現象と秩序』第13号をお届けします。

このコロナ禍の時代に、人文・社会科学は何ができるのでしょうか。この問いに有効に答える論文に第一論文（加戸論文）はなっていると思います。ウイルスという、私たち人間を寄生対象として必要としながら、その一方で苦しめる存在は、その寄生という側面に注目するならば、人間と環境の共生メカニズムの一部にすぎません。したがって、共生でありながらも宿主（の一部）を殺害する存在であるというこの理不尽さには、既視感があります。アトピー性皮膚炎に関していえば、「かゆみ」というマイナス事象を、搔くことに伴う「喜び」は、逃れがたいほど魅力的で嗜癖に至ります。このメカニズムの合理性が、嗜癖一般の合理性とどの程度同じでどの程度違うのか、是非本文をご覧ください。人文社会科学の論考は、それを読んだからといって問題が解決する訳ではありませんが、理解はできるようになります。理解すれば受入れが可能になります。ここに、人文社会科学の価値があるのでしょうか。

第二論文は、医療考古学で著名な遠部氏のフィールドワーク論文です。本誌はハイブリッド雑誌なので、紙版とどうじに、Web版も同時公開されています。Web版ではぜひとも写真の美しさをご堪能ください。

第三論文は、音楽療法特集の続編的論考です。一つの雑誌が、ある思考を順々に深めていく論考を継続して掲載していくならば、そこに、学術コミュニティが発生すると信じております。生活社会学の論文としても秀逸です。ご感想など頂ければ幸いです。

第四論文は、NHKではありませんが映像の世紀である20世紀を社会学的に分析しようとするものです。ビデオ関連論文が大量に載っている本誌らしい論考といえるでしょう。

最後の翻訳とその解説は、スポーツ社会学の論考であるとともに、障害社会学的研究でもある論考です。また、東京パラリンピックとの関係を考えれば、時事評論的な論考ともいえるでしょう。したがって、こちらについてもご感想など頂ければ幸いです。

ご感想・ご意見は、企画編集室宛に電子メールで頂戴できると幸いです。99%即日でお返事を差し上げます。どうぞよろしく願いいたします。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2020年度）

委員長：堀田裕子(愛知学泉大学)、委員：檜田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)
編集幹事：尾崎友祐(神戸市外国語大学)、編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第13号 2020年 10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (檜田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>